

エッセイ

たかが川柳されど川柳 (四)

上野 一彦

刑事ヴァランダーに学ぶ

私の親しい友人との会話は「何か面白いもの読んでいる？」で始まることが多い。スウェーデンの作家ステイーグ・ラーソンによる推理小説「ミレニアム」がことのほか面白いという話を聞いたのもそうした会話がきっかけだった。「ドラゴン・タトゥーの女」「火と戯れる女」「眠れる女と狂卓の騎士」と長編で、やがて文庫化されてからも上下から成る三部作という大作、おまけにラーソンは二〇〇

九年に次の作品を執筆中に死ぬというなんとも余韻溢れる作家であった。おまけに作品のヒロインであるリスベツト・サランデルは、アスペルガータイプの直観映像記憶抜群の人物であり、この種の設定にわたしはこの上なく弱い。それはさておき、今時珍しい「豆カン」愛好グループの一員である若い女性編集者から、R・D・ウィングフィールドのイギリス版コロンボ、フロスト警部シリーズを紹介された後、スウェーデンのヘニング・マンケルのヴァランダー刑事がおもしろいと聞いた。彼女の選球眼は豆カンの老舗情報と等しく信頼がおける。その結果、このスウェー

デンの刑事ヴァランダーものにどっぷりつかることになった。

スウェーデンといえば、一九七八年に『第一回国際LD会議』が開催され、恩師に同行し初めて訪れた地でもある。あのLDの命名者でもある米国のサミュエル・カーク博士にあったのもその時だった。ストックホルムから汽車で南下したノルケピングという鄙びた町で開催されたのだが、この町の名を小説に付帯されている地図で見つけた時には、三六年ぶりの邂逅であり、懐かしさがこの小説を一層身近なものにした。

シリーズは、「殺人者の顔」「リガの犬たち」「白い雌ライオン」「笑う男」「目くらまし道」「五番目の女」「背後の足音」「ファイアーウォール」、ヴァランダーこそ出てこないが「タンゴステップ」といずれも長編で、読み応えのある至福の時を過ごした。もつべきものは読書仲間といふべきか。

一つ一つの作品が、スウェーデンのみならず現代の文明と人間の本質を抉る、虐待、臓器売買、麻薬、インターネットのあくなき未来等々を深く扱う。田舎町がその舞台の発端という意外性を横糸に、実に見事な骨太の作品群である。ヴァランダーという中年のいささかうらぶれた刑事が、

その職にバーンアウトしかかりながらも、コツコツと論理を組み立て解決していく刑事ミステリー小説である。

これらの作品は制作順に読まなければならない。なぜならその縦糸には、ヴァランダー自身の人生を象徴する家族と職場の人間関係の変化が色濃く反映しているからである。私が深くはまったのは、この決して恰好よくはない中年の、いや退職を常に意識せざるを得ない過酷な刑事の生き様のリアルさであり、特に家族関係の変化がその縦糸として、鮮明に描かれているところである。

信頼していた妻からの突然の離婚の申し出、彼女の強い意志と家庭の破たん、寄り戻しの願いを打ち砕く彼女の再婚、その心の傷を埋める彼自身のもどかしい再婚願望の紆余曲折。成長期の娘との隙間風、彼女の自立への悶えと父親としての葛藤。そしてなによりも秀逸なのは、同じ構図の絵を描き続ける一介の田舎画家の父親。彼にとつては子ども時代からの精神的支柱であったその父親との精神的葛藤である。それはまた唯一の家族、娘との応接にも重なっていく。彼が刑事を職業としてからのその職に対する父親からのかすかな蔑視。それでも忙しい捜査の合間を縫って、郊外で一人暮らしをする父のもとを訪問する。気丈な父の徘徊に始まる認知症の発症。父親の家政婦との再婚と、事

態は大きく展開していく。

父親とのギクシャクした電話での安否確認と居心地の悪さを伴う訪問が、随所に織り込まれる。そんな緊張感を感じさせる間柄なのだが、実家を訪れると二人で決まってカードゲームをする。ヴァランダーの人間的優しさがそこに感じられる。やがて父の念願であったイタリア旅行をヴァランダーは仕事のわずかな隙間に実現させる。それも仲直りというか、互いの真実の姿を求めての父子二人きりでの旅行である。父の認知症の進行とアトリエでの火災と死。こうした彼の周りの家族や友人関係のさまざまな変化や出会いと別れがこのシリーズの縦糸をなす。

私もまた、長い間、父親との精神的葛藤を個人的に経験してきている。八年前に亡くなった母が生涯、最も心配していたことはそのことだった。私にとってヴァランダーの父親との葛藤はどことなくというより、小説を超えてわが身につまされた。

父は、私のマンションから歩いて二〇分ほどのところに他人の手を借りず、勝手気ままな独り暮らしをしているのだが、孤高というか、人との関わりを嫌い、年金と借家の収入での経済的独立と一人暮らしを当然のごとく続けている。世話好きの母の時代は訪れる人も多く、親戚の出入り

も頻繁にあったが、今はそれもほとんど途絶え、私以外に訪れる者もない。ここ数年間、週五日、通勤するかのように通っている老人ホームへの通所と銀行通いが彼の仕事となっていた。

その父が九六歳になり、ついに老人ホームへの入所を受け入れた。コンピュータが扱えなくなり、電話が掛けられなくなり、金庫のダイヤルを忘れ、日常の衣食がややしくなり、さまざまなトラブルが一気に押し寄せてきた。母の死後、将来を考え契約した老人ホームだったが、ホームで唯一人、通所という変則的な形をとってきたのだが、渋谷の地域開発によってバス停の場所が変わったのをきっかけに通うことが一気に困難になった。友人の句に「蟻の巢もこんな感じか渋谷地下」というのがあったが、まさにそのとおり。

父はホームの契約を打ち切り、自宅で一人暮らしをする強く言い張る。規則的にホームに通っていたころは、学校ではないが無断で休む場合にはすぐにホームから電話してもらおうのが安否確認の確実な方法だった。しかし、通うことが不規則になってきたので、私と家内の実家への訪問と互いの電話連絡だけ安否確認の方法となっていた。

しかし、時間の見当識を失った深夜の電話などが続いた

後、それさえ途絶え、悪いことに生活時間の不規則性から電話に応答しないこともあり、心配になり旅行を打ち切り、実家に駆けつけるとただただ熟睡中ということも一度ならずあった。何度呼んでも出てこず、鍵屋を呼んで内鍵を壊してはいるということがあってから、やむなく地域支援センターに介護の区分申請変更を相談しつつ、完全な自宅介護の道も模索した。

どんどん変化していく父の生活ぶりやどのような生活形態が父と家族にとってよいかの判断に迷うなか、遅いお役所仕事にもやきもきしていたそんな時に、「お前の言うとおり、ホームで暮らすのがいいかもしれない」「これは究極の選択だ」と一瞬ではあったが、驚くべき全うな発言が安否確認をする家内の携帯に飛び込んできた。

やっとわかってくれたのかと思う反面、これまでその種の相談は必ず裏切られてきた苦い思い出が積み重なりもしら。何度話しあっても、最後は「自分の頭はクリアーで、一人で十分に暮らしていける」と堂々巡りするので、自宅での生活にどのような介護態勢が可能かを何度も相談し、その都度、結論が出ないままになっていた。

今回もまた同じ繰り返しなのかと、たいした期待もせず、に家内を同行し父との禅問答覚悟の相談に行った。すると、

「ホームを終の棲家にする」とそれこそクリアーな判断を口にする。その気持ちが変わらぬうちにと、取るものも取りあえず、身の回りの物を整え、タクシーで件の四谷の老人ホームへ向かった。

現在、ホームでも、自分のスタイルに固執しながら、予想以上に順応している。以来毎週、父に合に行くのが私の日課となっているが、ヴァランダーにならってカードならぬ父の好きな将棋を一番指すことを習慣にしている。ここ数年間、いつも最後は父の理不尽な言動から、後味の悪い別れを繰り返してきただけに、父のこんな素直な面と、自分自身がこんなにもやさしく父に接することができることにあらためて驚いている。まさにヴァランダー刑事のおかげである。

【後記】

この半年での父の変化は著しい。レビー小体型認知症と云うのか、妄想の世界で本人は楽しく漂っている。手を握り一緒に歌を歌うこともある。誰がこんな日々を想像したろう。最期の最期に、もう一人の父のおつきあいを、そして親孝行のまねごとを、暫し味わっている。母も天上でびっくりして見ていることだろう。

白石一文作品との出会い

発達障害の関係者にとつて、市川卓司という小説家は貴重な存在である。作家としては、ベストセラー『いま、会いにゆきます』（小学館）、新作の『こんなにも優しい、世界の終わりかた』（小学館）、『壊れた自転車僕が行く』（朝日新聞出版）などで知られ、私のホームページでも何度か紹介している。彼のもう一面、彼自身が発達障害であることを公表しており、当事者としてメディアにも出演している。これまで、発達障害を軸に、彼とは何度か対談し、知己を得ている。

一昨年、日本LD学会の設立二〇周年記念の会でも、「発達障害と私」と題する講演をお願いした。その彼と数か月前、ある出版社で対談したとき、彼の親しい友人である白石一文氏もまたブライتنا発達障害仲間の作家であるとはじめて聞いた。以来、私は白石氏の作品の追っかけとなった。その白石氏の最新作が『彼が通る不思議なコースを私も』（集英社）である。主人公、椿林太郎と澤村霧子の恋愛小説であり、二人が合コンで再会した泡沫の一夜の夢の形を取る純文学でもある。

選ぶ林太郎に戸惑う・・・

この小説のなかでは、LDやADHD、それに学校で彼らを支援する特別支援教育士（LDや発達障害の啓発をライフワークにし、日本LD学会（今日会員八〇〇〇人という、心理・教育界の三本の指に入る大きな学会）を設立し、支援の専門職種、特別支援教育士（S.E.N.S）（今日、四〇〇〇人の専門家養成を行い、彼らは学校・相談機関で活躍している）を構想し世に送り出してきた私としては、現代の最先端の話題を扱う小説家が、そうした様相を鋭く捉える場面をしばしば経験もしてきた。

本書もそうした一冊である。現代一流の小説家ともなると、このような専門知識をもった作品を書く。登場人物に発達障害を登場させている例は外国には多い。その代表者は、ドクター・アレックスで知られるジョンサン・ケラーマンだが、本邦では、宮部みゆきの『模倣犯』（新潮文庫）、石田衣良の『少年計数器―池袋ウエストゲートパーク2』（文春文庫）、村上春樹『1Q84』（新潮社）などがある。

また、心理の専門職能資格として臨床心理士を扱ったものは珍専門資格であるS・E・N・S（特別支援教育士）が

林太郎は知能の高いADHD（注意欠如多動症）。ADHDは発達障害の一種で、注意集中にむらがあり、クラスの仲間たちのように授業に集中することが苦手で、活発ではあっても、自分勝手な行動が目立つきわめて多動な子どもだった。先生の声と教室の騒音が一緒に耳に入ってきて、ほとんど授業は理解できない。

しかしある決定的な出来事の経験後、事態は一変する。必要なことがきちんと理解できるようになる。それはADHDの注意集中に激的に効果を挙げる薬のあることが知られるが、それにも似た奇跡の経験となる。それまでの理解力のない、厄介な存在からクラスでも最高に理解力のある子どもへの変貌。彼は極めて優秀であるが、同時にきわめてユニークな生き方を選ぶ。

仲間たちの誰よりも受験エリートでありながら、私学の教育学部を選び、教員への道をひた走る。それは彼自身がADHDで苦しみながら、ある時点でそれを乗り越え、一気に能力の開花を経験したことから、同じような子どもたちを救いたいという強い信念がそこにあった。

小説は、古い小学校の伝統文化のなかでの挫折の後、彼は一介の塾教師の道を選ぶ。それも結婚を間近に控えてである。彼に揺らぎはなく、霧子はより困難な道を迷いなく

登場する小説は、私の知る限り初めての経験であり、この資格を作り育ててきたものとしては感慨ひとしおである。専門用語が教育用語に、教育用語が日常用語へと広がっていく歴史的現実の一ページをここに見る。是非皆さんに、

この魅力的な主人公、椿林太郎を味わっていただきたい。

【追記】一人の作家が気に入ると、同じ作家の作品を次々と手に取る習癖がある。白石一文『草にすわる』（光文社）もそうした一冊。タイトルの「草にすわる」は、詩人八木重吉の詩の一節。

わたしのまちが良かった

わたしの まちが良かった

こうして 草にすわれば それがわかる

中学・高校と長距離をやり、オリンピックの瀬古選手にあこがれていた青年の挫折とその後の同じ高校時代の先輩女性との同棲生活が淡々と綴られる。悪ふざけのような彼女との自殺未遂と九死に一生の帰還、そこから新に始まる二人の関係と日常は、久しぶりに純文学の源泉に触れた気がした。

たかが川柳 されど川柳 (平成二六年下半年期)

七月

暑き芝蒼きサムライ夢の跡

W杯優勝などという大言壮語、早々の予選の敗退。でも開催国ブラジルの優勝宣言も準決勝ドイツ戦でのまさかの七・一という歴史的屈辱の敗退。だからサッカーは面白いのかも。解説の松木元監督の「先に点を取ったほうが有利ですね」みたいな煩さも、すべて夏の夜の夢。まさに強者どもが夢の跡。

孫がいうジイは毎日夏休み

毎日サンデー化した退職後。一年中、夏休みのように見えても不思議はない。時間もてあまし、自分でリズムを作ることのむずかしさを思い知ったりして。誰しもが死に向かつて生きていくわけですから、若者もあと半世紀後には思い知るのです。

夏雲に雹カミナリの野心あり (銀メダル)

突然の雷雨、局地的な雹。それもピンポン玉大ともなれば驚き。この荒々しさは積乱雲のパワー。この内に秘めたエネルギーを何と読むか。野心と表現したがどうだったか

しようか。

【題詠】 話す

話し好き棺桶からも漏れ聞こえ

棺にそつと耳を当てると、故人の声が聞こえてきそうなのがする。死は絶対的な無口状態であることは百も承知だが、こんなに無口になるとは本人が一番驚いているのでは。話してはいけないことがまたひとつ (佳作)

人生には棺桶まで持っていかなければヴァならないことが一つや二つ誰しもあるのでは。そんな事どもがまた一つ増えたとすれヴァ、それこそが周りへのいたわりであり生きているということなのかも。

政治家はヤジとばすにも腹話術

ヤジは議場の花というのは知性とユーモアに富んだ議員の言うこと。小学校のホームルームの手本にもならないヤジの応酬は実に嘆かわしい。セクハラヤジで職を失う議員もいる昨今、誰が言ったかわからないように言うならそれは腹話術。

八月

この暑さ次はイルカに生まれるぞ

毎年巡りくる夏。夏は暑くなければ夏じゃないといながら、今年の暑さには身の置き場もない。次に生まれ変わ

るなら大海で涼しげに楽しげに泳ぐあのイルカになりたい。

父母よりも孫は祖父母とウマが合う (佳作)

どういうわけか孫は爺ちゃんや婆ちゃんが好き。爺ちゃんや婆ちゃんも孫ようなどという気持ちはさらさらなく、ただただ可愛がる。その無責任さ、放任主義が孫には心地よい。

猛暑酷暑の上を行くそりや極暑

言葉遊びのつもりはないけれど、このすごい暑さは暴力的で、猛暑や酷暑の上を行く。いつそ暑さの極みと「極暑」と名付けよう。

【題詠】 島

一言で家のなかでも島流し (銀メダル)

親しき仲にも礼儀あり、とはいいながらついワンマンな亭主は家族を傷つけてしまうことがある。あの一言をいつたがために、家のなかでも「遠島申し渡されるとは」・・・

繁栄が陸のなかにも島造る

陸の孤島という言葉があるが、ただ辺鄙な場所というより、都会の繁栄がその過疎現象を加速させている。そうした孤島を海ならず陸のなかに造ってきたのは現代文明のせい。

地下資源離島孤島を隆起させ

地下資源があると分かったとたんに離島孤島の領有権争い勃発。見捨てられていた離島孤島が突然高く評価され、その地位が上がっていく。その変化を隆起と表現してみた。

九月

球筋の錦織なすコート上

九六年ぶりとか。決勝は力尽きていましたが、それまではサッカーよりもずっと世界的な闘いでした。球筋か、弾道かで悩みましたが、ともかく記念の一句。

腹をみせ眠る猫の世テロもなし

世界中、テロだの、血なまぐさいあらそいばかり、猫の平和な姿から人間は学ぶことがありそうなの。

老いてこそ水に流せぬこともある (銅メダル)

なんでも丸くなるばかりではなく、歳とともにこだわりやスタイルも強くなる。だからこそ老いの一徹という言葉もあるわけ。

【題詠】 当たる

宝くじ当たれば世間鬼ばかり (佳作)

当たったことはないけれど、当たったら身内にも言わぬ方がいいと聞く。それでもあたってみたいものです。

陽当りと静けさ自慢終の墓 (佳作)

間敷だの庭の広さだの生きている時にはいろいろあるが、終の墓となると、とりあえず静けさと日当たりだけは間違いない保証。それで十分ですね。

あなたへの甘えなんです人つ当たり(佳作)

だから許せるの。ごちそうさま。でも、どうして一方的なのかなあ。甘えてみたい、思い切り。

十月

またひとつ歳をとったねハルキスト(佳作)

ノーベル文学賞を待ち望むファンと出版界。今年もまたお預けでした。賞を獲らずに歳を一つとった。

ひとひらの落ち葉にかけのお疲れさん(佳作)

精一杯、陽の光、風を受けながら、色づき、やがて散っていく一片の木の葉に、自分の人生を重ね、やさしくそっとかける言葉「お疲れ様」。

あれこれと冥土の土産やたら増え(佳作)

この頃、「冥途の土産に」とやたら生きいきそぎ、食欲な自分を感じての一句

【題詠】「加減」

いい加減それも浮世の処世術(佳作)

ちゃらんぼらん、いい加減。それも計算し尽くしたものだとすればかなり高度な処世術。人生にはゆとり、ゆるみ

があつて初めて回ることも多いもの。

できそうでできない恋の匙加減(佳作)

匙加減、それができれば達人です。深みにはまりやすい恋、適当なところで収まりが付けられれば苦労はしない。もうそんなチャンスもなさそうですが。

人の世は出会い別れの加減算

良いも悪いも結局プラス、マイナス。せめて心に残る良い出会い、別れを積み上げたいものです。所詮、プラマイゼロであつたとしても、記憶上は。

十一月

国会は揚げ足取りで今日も暮れ

団扇に始まり、ワインで辞職・・・いつもながらの国会風景。大切な議案よりくだらない応酬で時間が過ぎていく。国会議員にしてほしい安心して暮らせる生活の構築より党利党略。歳費返上して働いたら。

色づいて虫に食われて散る木の葉

先月、「ひとひらの落ち葉にかけのお疲れさん」とは別志向。下の句を「乙女も」と言ったら家内に「品がない」と叱られました。木の葉に込めたこの気持ち読んでくれたかな。

送る前変換ミスは身を潜め

終の友それは妻だと思ひ知る

歳と共にますます友達が大切になる。その先頭はカミさんなんです。友達なんかじゃないと叱られそうですが。

もう終わるまだ終わらないああ終わる(佳作)

いつも十二月になるとやること多く、気ぜわしい。そんな気持ちのあせり、変化をひらがな二文字で表してみました。

【題詠】「足」

冷える脚しゃべる湯たんば離せない(佳作)

温めあう姿。微笑ましいとみるか、いやらしいとみるか、身勝手と見るか、それはあなた自身のプロジェクトションかも。

師走ゆえ足りぬ足りぬおあしが足りぬ

言葉遊びと叱られそうですが。百足のような句です。走る、足りぬが三つ、おあしはダジャレ。面白いとみるかくだらないとみるか。

だめだめ越すに越されぬ一万歩

「ダメよダメダメ」の流行語というより、目標値の困難さを言いたかったのですが時間切れ。毎日一万歩が目標なんですが意外と高いハードルです。

(了)

あわてんぼうなのか、うっかりなのか。送信してから変換ミスとか打ち間違いに気づくことがとみに増えている。軽くは見直しているのですが。友人の変換ミスを見つけると優しく親しく感じます。

【題詠】「光」

どこ見ても幅を利かせる七光り(佳作)

タレントも議員も七光りやりのなかで思うのは、親を超える逸材の少なさ。違う分野だと興味覚えますが。

光よりもっと金をと叫ぶひと

死期が近づくと景色がきれいに見えると聞いたことがある。伝え聞くゲーテの「もっと光を！」の最期の言葉最後の言葉もその一部かもしれない。世俗的にはこんな輩もいるのでは。

ヒカリもの興味ないわとい子ぶる

光物を欲しがるご婦人よりも、こんなこと言われるとホツとします。本当はそれも作戦だったりして！

十二月

容赦なく潰れし家に雪が舞う

今年もさまざまな災難がありました。なかでも集中豪雨で土砂崩れのあと寒波が来て、そんな被災に合われた方を思うとぬくぬくと温まっている自分が申し訳なく感じます。